

「いけないこと」の中にある「価値あること」… ～ 認められ輝く瀬ヶ崎っ子 ～

学校長 日暮 勤

日差しまぶしく、緑が色濃い6月です。学校ではそれぞれの学年の遠足、高学年の体験学習、低学年の学校探検、中学年の社会科見学など、外に出かける学習の準備や実施に向けて、子どもも教師も精力的に動く姿が見られています。私もいろいろな学年の引率で、子どもとのかかわりを楽しんでいます。

さて、このコロナ禍の中、たくさんの「いけない」ことが私たちに課せられています。「話してはいけない」「さわってはいけない」「手を洗わなければいけない」「マスクを外してはいけない」「大勢で集まってはいけない」「食事中話さない」「三密」…。これらのことを守らない時に叱られるのは、大人よりも子どもの方が多く、「コロナに感染しないように」「感染させないように」と命を守るための切実な理由があるためです。多くなっていることで、大人は行為についての短い指導で済ませてしまい、その子どもがどうしてその行為をしてしまったのか、しなかったのかを意外と考えないで、指導にあたってしまうこともあります。

先日の授業中、校庭で列を作って静かに待つ子どもたちの中で、列を離れて、別の子どもに駆け寄って、話をしている子どもの姿を見ました。その場にいた教師は、その子どもの行動に気づき、短く指導を入れていました。指導を受けた子どもは頭を下げて、自分の列に戻ってきました。その子の様子から教師は何か気づいたのでしょう。列に戻ったその子どもに二言三言話をしました。その子どもの表情がちょっと安心した表情に変わったように見えたので、後からその場面について教師に話を聞きました。その教師によると、その子は違うところに整列していた友だちを正しい列に導こうと思い、その場に行って話していたということです。その教師は事情が分かり、その子どもに「そうだったんだ。気づけなくてごめんね。ありがとう」と声をかけたそうです。「いけない」と見られる行動の中に、他人のために自分事として関わる子どもの姿を見つけ、その行動を価値づけることができた出来事でした。

私は、コロナでなければ叱られることではない、とても良いことがたくさんあるということ子どもたちに伝えることや、そのように行動した子どもの背景を理解しようとする大人側の意識が、とても大切だと感じました。このような日常だからこそ、行為だけに目が行き、自分なりの解釈でしかとらえられない私自身の見方を豊かにしていかなければいけないと感じました。

5/20(金)には各委員会の委員長が、団結して瀬ヶ崎小のリーダーシップを全校にアピールする集会が行われました。各委員長の元気いっぱいのアピールと、それを応援し盛り上げる6年生を中心とした全校児童の姿が見られました。5/23(月)のPTA総会、学校説明会で来校された保護者の前でも、さらに気持ちの入った「瀬小を私たちが盛り上げます」というアピールが発表されました。「大きな声は出しません」などという指導よりも、6年生の子どもたちの気持ちを一つにして発信された宣言と、その宣言を受け止め、大きな拍手で称える保護者と教師の思い。その光景に、気づくと私は涙していました。

発表後の子ども達に「ありがとう！気持ち伝わったよ！」と伝えた私に「涙ふきなよ！」という子どもの声。やり遂げた喜びと認められた実感を笑顔で表現する子ども達。コロナ禍でも温かい瀬ヶ崎小から「いけない」ことにこだわる以上に、大切なものがあると教わりました。

今後も感染状況や環境等は変化していく中ですが、保護者、地域の皆様との温かい関わりとつながりを通して、子どもの思いを大切にしていきたいと思えます。

そんな気づきを与えてくれた子ども達に…心を込めて伝えます。 「ありがとう」

